



Title	イラン伝統音楽の即興概念：即興モデルと対峙する演奏者の精神と記憶のあり方
Author(s)	谷, 正人
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45699
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	谷正人
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第19137号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	イラン伝統音楽の即興概念—即興モデルと対峙する演奏者の精神と記憶のあり方—
論文審査委員	(主査) 教授 根岸一美 (副査) 教授 上倉庸敬 助教授 伊東信宏 講師 堂山英次郎

論文内容の要旨

本論文は、イラン伝統音楽における即興の概念を、演奏者の個性という観点からではなく、演奏者(が属する文化)に備わる心性や記憶のあり方という観点から解明することを目指した研究である(A4判本文105頁、参考文献7頁)。従来の研究においては、音楽家が即興の境地に達する以前に暗記し理解してきた「伝統的な旋律型」の解明に重点がおかれていたが、そこには演奏の基盤となる「モデル」と演奏者の「自由」とのバランスのなかで即興演奏が行われているとの、見方があったという。このようなパラダイムに疑問を投げかけることが、本論文の出発点となっている。

「第1章 イラン音楽における同一性と差異性」では、W.J. オングが『声の文化と文字の文化』で示した所説を援用しつつ、イランの演奏者にとって「モデル」となる旋律は相互に明確な差異をもった形で記憶されているのではなく、演奏者たちに共有の、したがって差異の緩和された、中和化された「思い出」にとどまっており、演奏の個々の瞬間においてのみ具現化される、との捉え方を示している。例えば西洋的な感覚からは同じとみられる演奏を、演奏者たちが「違う」と称したり、逆に異なるとみられる演奏を「同じ」と称したりする認識のあり方は、まさに即興のこうしたあり方によるのだという。そして、その都度の演奏を、個々の「プロダクト」として数えるような感覚はイランの演奏者たちにはないとし、それを即興演奏の「非回数性」という言葉で説明している。「第2章 <語りの文化>における即興の概念—物語の特質とそれを支える記憶のあり方—」では、イランの「語り」パフォーマンスの実例をとりあげながら、語り手たちがひとつのストーリーを、慣用句的・決まり文句的表現の蓄積として記憶しており、それを個人のものとして「私有」することなく、語り手たちの間で様々に「言い換え」てゆく、というあり方に注意を向け、第1章への補いとなる論を展開している。「第3章 イラン音楽の<あらすじ>—演奏形式と楽曲にみられる<charkh>—」では、「言い換え・パラフレーズ」によって行われることで冗長さ・多弁さに満ちたものとなる即興演奏が、全体的には「チャルフ charkh(廻るもの)」という概念によって、時間的に制御された構造を持っていることを指摘している。「第4章 グーシェ(旋律型)分析」では、前3章における論点にそって、6人の音楽家が伝承する旋律型集(ラディーフ)を分析し、複数の音楽家がいかに伝統的旋律型という共有フレーズを用いて音楽を創り上げているのかを浮き彫りにするとともに、どの音楽家も全体としてチャルフという流れを例外なく形成していると説いている。最後の「第5章 即興を学ぶコンテクストの変容—<書くという精神構造>がイラン音楽の営みに及ぼした影響—」では、20世紀初頭より音楽教育界にもたらされた教則本の登場とともに、それまでの「状況

依存的」プロセスの中で伝授され習得されてきたチャルフ観の希薄化が生じ、そのことから即興演奏の本来のあり方が変質してきているとの指摘を行っている。「結び」では、しかし、こうした現代の状況があるにもかかわらず、イランが声の文化圏にあり、その認識こそがイラン音楽の即興を研究するにあたって不可欠であることを確認し、本論文の意図を改めて強調している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、イランの伝統音楽における即興演奏において、演奏者がモデルとされる旋律型に対してどのような考え方や感覚をもって対峙しているのかを探っており、音楽についての、内側からの観察と思索という性格が強いが、そのことが成り立ち得た背景として、申請者が長年にわたってイラン伝統音楽を実践してきており、イランにおける修行の経験を積んでいることが挙げられよう。しかし、本論文では、そうした個人的、経験的な知をあえて捨象し、イラン伝統音楽における即興の本質論を展開している。とりわけ、ペルシア語で「車輪」を意味し、イラン人の人生觀を探るための重要な手がかりとなっている「チャルフ」という概念を用いることにより、イラン音楽の演奏形式や楽曲構造を説明しようとしている点に、本論文における最も独自な、かつ意欲的な面が現れている。2005年2月3日に行われた公開口頭試問では、円環としての普遍的な性格を示すチャルフと実際の音楽との対応についての疑問や、文字の文化と声の文化が本質的な区分であるのか、むしろロゴス的か非ロゴス的かというとらえ方が必要ではないか、との疑問や、「音楽家の精神」を掲げながら、現実の演奏家たちへのフィールドワーク的アプローチや、個々の演奏家の言説についての研究が欠落していることへの疑問などが示されたが、申請者はこれらの問い合わせに対して的確に答え、あるいは研究者としてふさわしい解答を示すことができた。イラン社会の特質を「声の文化」であると捉えることによって、20世紀初頭以来のさまざまな異文化、とりわけ「文字の文化」からの影響を捨象し、いわば永遠の相のもとにイラン伝統音楽の即興性を把握しようとする論考のあり方が、現実の状況に照らして厳しい精査を招くことは必定ともいえるであろう。しかし、本論文はイラン伝統音楽の特質を真正面から捉えようとした研究であり、即興音楽の即興性とは何かを探求した美学的な論考でもあり、専門研究者の著しく少ない状況にあって、本研究が音楽学およびイラン文化研究にもたらす寄与は少なくない。よって本論文を、博士（文学）の学位を授与するのに充分な価値を有するものと認定する。